

大学教育の効果を測定するための研究環境の基盤整備

【代表者】田中 久美子 島根大学 教育・学生支援機構 大学教育センター キャリア担当 講師

【研究の目的と内容】

このプロジェクトは大学卒業生にインタビュー調査を行い、大学教育の効果検証を行うための研究環境整備を行うことを目的としている。近年大学には、学術研究とともに、教育理念に基づく教育活動を展開し「生涯学び続け、主体的に考える力を持ち、未来を切り拓ひらく人材」を育成することが求められている。このような人材育成が果たせたかどうかは、学生が社会に出て、ある程度の社会人経験を積んだ後に確認する必要がある。先行研究で行われている効果検証は、社会人基礎力に代表される能力指標を用いた、入学時と卒業時の差の確認に留まるものが多い。社会人基礎力はこれまでも多くの研究で用いられており、蓄積データと比較検討するには向いている。しかし社会は日々変化し、働く人に求められる能力も変化していると考え、従来型の調査だけでは重要な点を見落としてしまう可能性がある。本プロジェクトでは「大学教育の効果の検証」にどのような評価指標が有効なのかを十分に検討したい。そこでまずは各地で活躍する島根大学の卒業生にインタビュー調査をすることで卒業生の姿を追い、どのような問いかけが彼らの姿を浮き彫りにするかを実証する。

インタビューで行う設問については、以下の5つを中心的な問いとし、合計17個の質問項目を作成して、全てのインタビューイに問いかける。

時期	質問項目の一部（案）
学生時代	正課での学び（教養/専門の授業で学んだことは社会人になって活かされているか）
学生時代	正課外での学び（何にどのくらい注力してきたか。活かされていることはあるか）
学生時代	インターンシップ（どこでどんな体験をしたか。活かされていることはあるか）
卒業後	社会人になって、新たに学び始めたことはあるか【生涯学び続ける力の確認】
卒業後	社会人になって、自らが中心になって物事に取り組んだ経験はあるか【主体性の確認】
卒業後	将来設計についてどのように考えているか【未来を切り開く意識の確認】

【研究の成果(本研究によって得られた知見, 成果, 論文, 学会発表, 外部資金への応募見込み等)】

1 研究成果

2019年12月から2020年3月までの期間に、10名の卒業生へインタビューを実施した。5名の山陰地域出身者と5名の山陰外出身者に対してインタビューを行い、島根大学への入学から学生生活、そして現在の仕事や今後のキャリアプランについて質問をした。インタビュー対象者の詳細は下の表の通り。

表 インタビュー対象者一覧

No	卒業	所属	勤務先等(カッコ内は前職)	出身	勤務地(カッコ内は前職)
1	2016年3月	理系	公務	島根県	島根県
2	2016年3月	理系	専門商社	島根県	島根県
3	2018年3月	理系	小売(販売業)	兵庫県	兵庫県(島根県)
4	2018年3月	理系	森林管理	愛知県	島根県
5	2016年3月	理系	電機メーカー	愛媛県	東京都
6	2004年3月	理系	団体職員(小売)	島根県	島根県(島根県)
7	2014年3月	文系	NPO法人(介護福祉)	兵庫県	島根県(島根県)
8	2016年3月	文系	情報通信	神奈川県	島根県
9	2018年3月	文系	運輸	島根県	東京都
10	2018年3月	文系	IT(IT)	鳥取県	東京都(沖縄県)

それぞれのフィールドで活躍する卒業生10名へのインタビューを通して確認できた3点をここで紹介する。

まず、学生時代の「学び」は、プレゼンテーションなど、授業やゼミでの発表経験が役立ったというコメントが多くあった。社会人になると、新人の頃からプレゼンテーションが求められるため、社会に出てからというよりも、学生時代に培ったことが役立ったと感じる場面が多くあるのかもしれない。ゼミ発表の話題が多かった。

2つ目に、学生時代の思い出として「地域」という言葉が多く出てきたのが特徴的であった。一部を紹介すると、「地域の人との人脈が今の仕事に活かしている(島根就職者)」「地域の人よさが印象に残っていて、機会があれば島根に戻りたい(東京就職者)」「部活のつながりで地域の人たちと交流した時にオヤジ飲みを学んで、今の営業職に活かしている(東京就職者)」等の声があった。学生時代の地域との交流が思わぬところで役立ち、地域への愛着を育んでいるのかもしれない。

3つ目に、前向きな転職を遂げている点である。今回お会いした10名中4名は1度の転職を経験している。転職をしていない6人の中にも、転職を本気で考えたことがある人は2人いた。終身雇用を前提にした考えで言うと、転職をするよりも初職を全うする方が良いと考えられがちである。しかし今回のインタビューを通して、転職の有無ではなく、自分の将来設計が出来ているかどうかことが重要であることが示された。転職をした4人の内3人は、仕事に真剣に取り組み、悩んだ挙句に更なる自己成長のフィールドを他所に求め、職場の理解を得て転職したというケースであった。もう1名については、山陰外出身で島根へ就職したが、人手不足を理由に休みが取れず、過酷な労働環境で体調をくずし、退職とともに実家へ戻ったというケースであった。現在は体調もよくなり、地元で新たな仕事を得て働き始めている。大学時代の友人と連絡を取りながら、「将来は島根でカフェを経営する」という新たな夢を語ってくれた。それぞれの転職経験者からは、転機と向き合い、困難を乗り越える力を感じた。変化の激しい世の中には、まさに転機を乗り越える力が必要である。彼らのその力が学生生活で培ってきたのかどうか、更なる調査が必要である。

以上の3点が、本プロジェクトで確認できた。今後はインタビュー内容のテキストマイニングなど精緻化された分析を試みる。加えて新たな質問項目作成にも取り掛かる。17の質問項目のうち、卒業生像を浮き彫りにすることには役立たなかったものや、新たに確認したい質問が出現したからである。これらに取り組むとともに、今回のインタビューへの継続調査を行い、創出支援を受けた本プロジェクトを昇華させる。

2 今後の予定(学会発表等)

2020年5月30日(土)～31日(日) 日本高等教育学会第23回大会 発表
上記発表を経て内容をブラッシュアップし、同学会等へ論文を投稿予定。